

見る! 触る! 学ぶ!

～縄文土器編～



縄文土器を見て・触って・学びましょう

山梨県は縄文時代の遺跡の宝庫です。しかし、遺跡があることを知っていても、実際、土器を手にとって触ることは少ないと思います。そこで、貴重な文化財を心おきなく、見て、触れるように、山梨県埋蔵文化財センターで資料をご用意いたしました。是非、色々な場所で、折に触れてご活用頂きたいと思います。なお、当センターでは、3年計画で収蔵庫の中にある膨大な資料を再整理しております。今回は、縄文土器78点の復元・修復をおこないました。詳細なお問い合わせについては、巻末に示しましたのでご利用ください。

縄文時代って・・・

今から約1万2000年前から約2400年前までの約1万年の間のことを縄文時代とよんでいます。

縄文時代は、シカやイノシシなどの狩猟と木の実や山菜などの採集で生活していました。狩りに使う石器・生活に欠かせない縄文土器・祈りや信仰に使う土偶、体を飾る装身具など、色々な道具を使って、豊かな生活を行っていました。

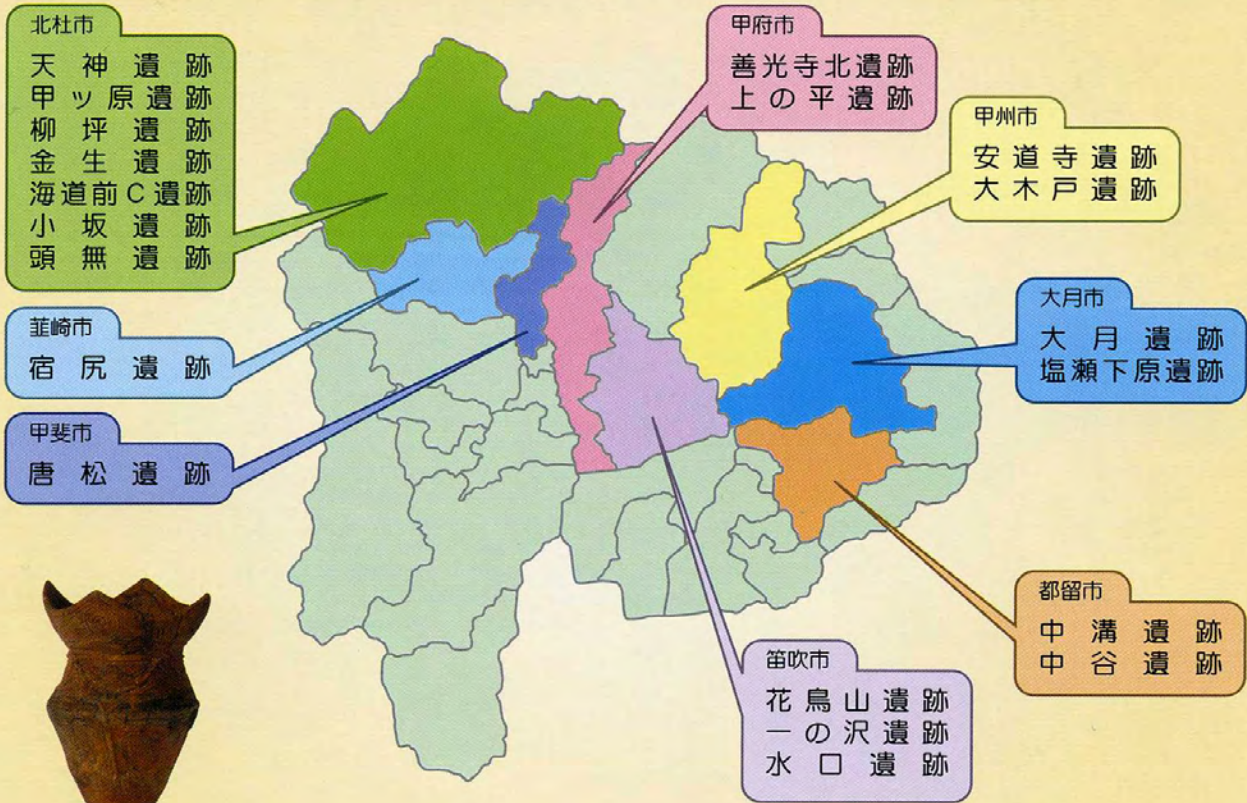


縄文土器って・・・

豊かな縄文時代に使われる道具のなかで、もっとも多く発見されるものが縄文土器です。縄文土器は、約1万年の間に形や文様が様々に変化します。それは、変化する環境やそれに応じた生活状況が原因となりますが、色々な用途にあわせ、土器づくりを支えていた、ものを作る想像力と高度な技術があった事をしめています。



復元・修理された土器はこれらの遺跡から発見されたものです。



縄文土器を見てみよう！

縄文時代の大きな特徴の一つである縄文土器の発明は、人々の生活に大きな変化をもたらしました。特に、土器を火の中において食べ物を煮るということはすばらしい発見で、食事のメニューを豊富にし、季節を通して同じ場所に住むという習慣の第一歩を可能にしたのです。ここでは、縄文土器の多くが煮炊きに使われていることから、食に関する土器を見ていきましょう。

土器を見る時のポイント！ 食に関する土器

ポイント！！

火の先端が当たる部分に黒くススがつきます。



火の中に置いて使うもの

縄文土器の多くは、火の中に置かれ食べ物を煮るために使われます。そのため、土器の真ん中から上が火をうけ、すすけて黒くなっています。



液体を入れるもの

注口土器と呼ばれている土器です。急須のような注ぎ口がついているのが特徴です。

食べ物を入れるもの

浅鉢と呼ばれている土器です。お皿やお椀のように使われました。



いろいろな縄文土器の形や文様

縄文土器の形



深鉢形土器



鉢形土器



※このような形の土器もあります。



浅鉢形土器



約1万2,000～9,000年前（縄文時代草創期）の土器

約9,000～6,000年前（縄文時代早期）の土器

この時代の遺跡はとても少なく、土器も完全な形のものがほとんどありません。底が尖った形や丸い形が特徴で、ものを入れて保存するには難しく、煮炊き用であると考えられています。



約6,000～5,000年前

（縄文時代前期）の土器

中部地方では、この時期の中頃に底の形が尖ったものから平らなものに変わります。縁の部分进行口縁といいますが、平らなものばかりでなく、波状のものもあります。山梨では、この時期の後半に遺跡が増えます。右の写真の土器には、竹管文という竹状の道具を使ってミミズ腫れのような文様が土器一面に施されています。

